

健診検査センターニュース

No.527 号

運営委員会より

2月19日（木）平成26年度第11回の運営委員会を開催いたしました。

1. 特定健診1月の実施件数は、下記のとおりでした。

	1月受診数（前年比）	累計（前年比）	函館市国保受診率
函館市国保	1,155人（11人101.0%）	10,482人（725人107.4%）	1月現在 19.29% / 目標 30.0% 達成率：64.3%
後期高齢者	263人（61人130.2%）	4,401人（490人112.5%）	
その他	122人（12人110.9%）	1,891人（69人103.8%）	
合計	1,540人（84人105.8%）	16,774人（1,284人108.3%）	

実施機関：96施設／登録機関106

- 1月の受診者数は、1,540人と前年に比べ84人の増加となりました。内訳としましては、個別健診での国保加入者、後期高齢者の受診者数が大きく伸びました。
- 平成27年度の北海道医師会「特定健康診査 集合B契約」登録医療機関数は、当センターを含め104医療機関となりました。
- 平成27年度「函館市国保・後期高齢者・生活保護受給者」に関する特定健康診査実施医療機関の登録につきましては、3月の「函医ニュース」でご案内いたしますので、よろしくお願い申し上げます。
- 平成27年度「特定健康診査」並びに「集団がん検診」等の料金(案)について協議し、承認されました。特定健診の検査料金の詳細につきましては、実施医療機関が決まり次第、ご案内申し上げます。

2. 27年1月の健診検査事業収入は、下記のとおりでした。

	1月（前年同月比）	26年度累計（前年比）
一般検査収入	107.1 %	97.9 %
健診収入	118.1 %	104.3 %
合計	111.9 %	100.7 %

3. 平成27年度の収支予算(案)につきましては、協議し承認されました。
2月24日（火）開催の理事会に上程されます。

《 ちょっと一言 》

健診検査センター運営委員広報担当の小葉松です。

2015年2月5日にNHKで「浦安市が卵子凍結保存計画 自治体で初」というニュースが流れました。偶然そのニュースを見ていた私は思わず「ばっかじゃねえ！」とつぶやいておりました。浦安市が順天堂大学と共同で、少子化対策として、卵子の凍結保存にかかる費用や技術者の人件費の一部を補助するという話です。女性の卵子は年齢とともに質が低下し、妊娠の可能性が低くなるため、晩婚化が進む中、浦安市は少子化対策の一環として、希望する住民の女性に利用してもらえればと話しているそうです。

妊娠出産は人一人を作り出す作業です。受精卵を育み、胎児を出産するまでの過程は、全身の全ての臓器を動員して、女性が命がけで行うとても大変な作業です。いくら卵子だけ若くても、身体の他の臓器が老化していれば、様々な妊娠合併症が起き、時には児の健全な発育が妨げられることとなります。数年前に某女性国会議員が臨床事例を公表してくれたにも関わらず、このような計画が税金を投入して行われることに怒りさえ感じました。

産婦人科を生業にしていると、人間の生殖にも「旬」があると強く感じます。初産の最適年齢は間違いなく18~30歳ぐらいでしょう。30代前半の初産もさほどリスクは上がりませんが、産める子どもの数が少なくなります。産むこと以上に育児には気力体力を要します。産み始めが遅いと、3人4人産み育てるのは無理というお母さんがほとんどです（私も2人でダウン）。私の外来には30代後半~40代の初産で育児中のお母さんが不定愁訴で受診されることがしばしばありますが、話をよ~く聞いていって辿り着く悩みは「育児がこんなに大変だなんて思わなかった。」です。生殖は基本的に本能に左右される行為である以上、本能のなすがままに繁殖した方が、医学的には間違いなく合併症も不妊も少ないはずですが、今の日本では、10代~20代の若者が本能のままに妊娠出産子育てをする社会的環境は失われてしまいました。中卒で就職する人々が「金の卵」と呼ばれていたのは古き良き時代だったんですね。

（文責 小葉松洋子 この原稿は北海道医報「会員のひろば」にも使い回しております）

公益社団法人函館市医師会 函館市医師会健診検査センター
TEL 0138-57-6571・FAX 0138-57-6580
E-mail : info@hma-labo.jp